



さぎし  
詐騎士 6


---

かいとーこ  
Kaitoko



レジーナ文庫

Regina



登場人物  
紹介

**ギルネスト▶**

ランネル王国の第四王子。  
別名「サディスト」。  
凄腕の魔術師で軍の幹部。  
ルゼを結婚相手として  
狙っている。

**グランディナ▲**

ギルネストの妹。  
ニースを嫌っている。

**▲ニース**

最強の剣士で  
グランディナの婚約者。

**◀エリネ**

実りの聖女となった  
純朴な少女。

**▲ルルシエ**

新しい女騎士。  
元傭兵。

**▲エステル**

新しい女騎士。  
魔術師でもある。

**▲アリアンセ**

裕福な貴族の娘だが  
自ら志願して女騎士に。

**エノーラ▲**

国内でも有数の商家、  
ゼルバ商會を仕切る美女。

**ルゼ▲**

身分、年齢を詐称し聖騎士と  
なった少女。がいらいじつ  
人や物を探る傀儡術が得意。  
最近は、ギルネストの急接近  
に混乱する日々。

# 目次

詐欺士 6

書き下ろし番外編

問題と解決方法

369

7

詐<sup>さ</sup>  
騎<sup>ぎ</sup>  
士<sup>し</sup>  
6

## 第一話 聖騎士の事情

夏も盛り。宮殿の広大な敷地の方々で、花々と雑草の攻防が繰り広げられている。雑草は庭師達にむしられるのだが、夏から秋にかけては、少し目を離すとすぐに姿を見せる。人目につきにくい場所は、特にそうだ。放置すれば花々が駆逐されるのは目に見えている。

だが、それも同じ敷地内にある神殿に近づくとも一変する。まるで春のように花が咲き乱れ、草むしりなどほとんどしていないにもかかわらず、雑草は一本もない。

花々に囲まれる神殿。これこそが、実りの聖女、エリネ様がお住まいになるリザント神殿だ。

育てたい植物は美しく伸び、育てたくない植物は芽吹くことすら許されない。それが実りの聖女の力の一端である。

この神殿は三階建てで、一階は拝殿、二階はエリネ様のためのお部屋と聖騎士の控え室。三階は神殿に勤める女達の部屋だ。離れには聖騎士達の宿舎がある。私、ルゼ・デユサ・オブゼークは、この神殿でエリネ様をお守りする『花冠の騎士団』の女聖騎士である。

かつての私は、ただの孤児だった。だが、領主様の次男、ルフエス・デユサ・オブゼーク様に成り代わって騎士をしていたら、あれよあれよという間に、ルフエス様の双子の妹、つまり貴族の娘ということにされてしまった。

それからの私は、オブゼーク家の娘として宮殿に出入りし、このランネル王国の第四王子であるギル様——ギルネスト殿下と一緒に、七年前に癒やしの聖女を誘拐した犯人一味を探す日々。だがその間に、連中が実りの聖女エリネ様にも手を出そうとしていたため、こうして女聖騎士になってエリネ様をお守りしているのだ。

この春エリネ様は、お披露目の花祭りで命を狙われた。だから本当は色々な場所に赴いて人々と接してほしいところを、やむなく神殿内に籠もりきりにさせている。

現在エリネ様は、二階の自室に画家を呼び、肖像画を描いてもらっていた。周りには、エリネ様の顔を知らない人でも一目で実りの聖女と分かるよう、植物の鉢がいくつも置かれている。エリネ様はその中でポーズをとるかたわら、力を制御する練習として、特定の植物だけ大きく成長させているところだ。だが疲れて集中力が切れてきたのか、ふ

と小さくあくびを漏らした。

「そろそろ休憩にいたしませんか？」

私が提案すると、画家——エリネ様のお父様のアエンスさんは顔を上げた。

巨大なウサギのぬいぐるみのような、ウサギ獣族のラントちゃんも、植物の中から期待に満ちた目を私に向ける。

肖像画の中の彼は鉢植えに交じって床に座り、つぶらな瞳でエリネ様を見上げていた。彼は魔物が悪い子ばかりではないと世間に宣伝するために、エリネ様のベット——お友達をしている。このようにして一緒に描かれるのも、宣伝の一環である。けっして、ここに交じってたら何となく可愛いからとか、そんな単純な理由ではない。

「そうですね。エリネもそろそろ飽きてきたようですし。昔からじっとしてられない子で」

エリネ様のお母様、ルイカさんがころころと笑う。助手として、アエンスさんと一緒に来ているのだ。変な勘ぐりをされることなく安全に親子を会わせようという、私の友人で神官医を務めるセルジアスの計らいである。もちろん、アエンスさんの画家としての実力もあつてのことだ。

父親が愛情たっぷり描くことから、絵の中のエリネ様は温かく穏やかな美しさをたたえており、初々しくも気品あるお姿だ。周りの鉢には植物がまばらに成長している様子が生き生きと描かれ、ラントちゃんも可愛い。絵画に疎い私も欲しくなるほど素晴らしい絵だ。

「お母ちゃんだつてじっとしてられなくて、部屋の中をちよろちよろしてるじゃない」  
エリネ様はぼそりと愚痴をこぼした。聖女としての自覚が出てきて、それらしく振舞えるようになった今でも、両親の目の前では素に戻ってしまうようだ。だが、たまにはそれもいいだろう。彼女が唯一、心から甘えられる相手なのだから。

こんな平穏な日々が続いてくれればいいのだが、花祭りでエリネ様の命を狙った犯人はまだ捕まっておらず、黒幕の見当も付いていない。だから夏の陽差しが日に日に厳しくなるうとも、聖騎士達には引き続き、エリネ様のために切磋琢磨してもらっている。最近は特に真面目に訓練しているので、比較的安心して見ていられるようになった。まあ、それには少々理由があつたりするが。

侍女達がお茶の準備をしている間、エリネ様が立ち上がって窓辺に寄った。

「皆さん、こんなに暑いのに大変ですね……」

外で訓練している聖騎士達を見て、エリネ様は呟いた。

「それが仕事ですから。強くなるのは、彼らの本望でしょう」

今は、実力の近い者が組んで徒手格闘とじゅかくとうの訓練をしているところだ。人を投げたり殴ったりするのにも技術はいるから、毎日練習しないと、もしもの時に動けない。

「以前に比べて一層訓練に身が入るようになりましたし、動きも格段によくなっていますよ。もっと早くポーテン様にお願いすればよかったですねえ」

と、私は近くにいたポーテン様に笑みを向けた。ポーテン様は幹部組織である紫杯しはいの騎士団に所属する方で、実は現在聖騎士達を指導して下さっているのは、そのポーテン様が回してくれた従騎士じゅうきしである。

お忙しい方のはずだが、聖騎士達を鍛きたえていたニース様とティタンが色々あって隣国に出張することになったので、その間の代理を快く引き受けてくれたのだ。

ポーテン様は、上機嫌で出されたばかりのお菓子に手を伸ばした。

「あれは元々騎士団の指導教官をしていてね。面倒見もいいし、何でも出来る」

ポーテン様は自慢げに言う。若い侍女や巫女みこ達とお茶会の席に着き、美味しい物を食べて、それはそれは幸せそうだった。彼は甘い物が好きなようで、指導には直接関係ないのに、必ずお茶の時間を狙って様子を見にやって来る。

「ニース様の推薦でしたので心配はしていませんでしたが、期待以上でした」

「彼はエディアニースくんの兄弟子にあたるからね。しかし、若手の中でも最高の逸材

であるエディアニースくんを、カテロアに派遣してしまった殿下の大胆さには舌を巻くよ」

ニース様ことエディアニース様はギル様の友人で、騎士団最強の名をほしのままにする剣士である。

そんな彼は先日、二度目の訪問をされた隣国カテロアのフェリセナ姫が帰国する際、護衛として同行していった。現在紫杯に所属するギル様の従騎士——私の兄弟子ティタン、そしてギル様が出張先で拾ってきたレイド——の二人も一緒である。そしてそのまま、少しばかり滞在している。

表向きはどんな名目なのかは知らないが、本来の目的は、ランネル、カテロア両国の北で出回っている商品の調査のためだ。

エリネ様を狙う連中は聖女誘拐以外にも色々活動しているようで、ギル様は両国の物流を突き合わせて、怪しい動きのある場所を手当たり次第に調査しているのである。国内であれば、聖女を守る非公式団体、火矢ひやの会の人々を動かせるが、国境を越えたら隣国と連携しなければ動きにくい。

なお今回、ティタン達が隣国に行ったのは、フェリセナ姫の提案であった。

ティタンには、ただ歩いているだけで他人の秘密を暴露してしまう奇妙な癖があり、

一部では悪魔と呼ばれている。しかしお姫様がそんな胡散臭い話を信じるなんて思わなかった。どうやらテイタンは私の見ていないところで何かしてかしていたようである。

誰かが何かを隠して悪巧みしているこの件においては、テイタンは最適の人材と言えるだろう。

ニース様とレイドがついていったのは、いつものように秘密を暴いたテイタンが、その後誰かに狙われかねないからである。レイドは気配に敏いし、ニース様は身分があつて強い。この三人なら最小限の人数の派遣で済む。

「ああ、そうそう。そういうえば、あの二人は向こうでモテてるみたいですよ」

私はふとゼクセンの話を思い出して言った。

あの二人とは、もちろんテイタンとレイドのことだ。今朝ほど私の長兄からの手紙を見たゼクセンが、笑いながら教えてくれたのだ。私の長兄はちょうどカテロアに留学していて、そこから情報が素早く流れてくるらしい。しかも長兄とゼクセンは昔からの付き合いだから、手紙には彼らの現況が面白おかしく書かれていたようだ。

しかし長兄も大変だ。ちょっと留学してたら、私のような妹が出来て、しかもその妹のせいで実家の近くに魔物達と貿易するための拠点が作られ、さらにはそれ繋がりで魔物も紹介されたらしい。そんな状況をさっくり受け入れるあたり、さすがオプゼーク家

の長男。

「あの二人みたいな平民のエリートなら、手が届きそうなものね」

「条件の良い伴侶選びに必死なのは、貴賤を問わないのね」

エリネ様付きの侍女であるカリンとウイシユニアが、クッキーを手で割りながらくすりと笑い合う。

「二人とも真面目だから、ドアのすぐ外まで夜這いに来た人に気付かないふりして、布団被って寝たらしいですよ。別々の部屋にいて打ち合わせもしていないのに同じことをしている、ニース様が大受けしていたそうです」

エリネ様もその現場を想像したのか、くすくすと笑った。

「それ、真面目すぎやしませんか」

お茶会に参加していた聖騎士のスルヤが言う。その言葉を耳にした途端、女達は一斉に彼に対して冷たい目を向ける。寒々とした沈黙の中、聖女付きの巫女、モラセアが代表するかのように口を開いた。

「——そのように聖騎士の品位を落とすようなことは、くれぐれも、くれぐれも他所では言わないで下さいませ。聖騎士より、聖騎士ではないお二人の方が真面目だなんて、冗談にもなりません！」



モラセアは顔を強張らせ、瞬きもせずにスルヤを見つめて言った。  
「……ご、ごめんなさい」

スルヤは、普段元気で可愛らしいモラセアの剣幕に堪らず謝罪した。

「恋人同士のことならとやかく言いません。ですが不誠実な、聖騎士として恥ずべき交際をしていらつしやるのであれば、聖女様の騎士には相応しくありません。聖女はお一人しかいらつしやいませんが、聖騎士候補なら掃いて捨てるほどいるのをお忘れにならないよう、ご忠告申し上げます！」

「すみませんすみません。浮気しませんから許して」

「え、恋人がいらつしやったんですか!？」

モラセアが目をひん剥いて驚く。私も驚いた。

「いや、いません。募集中です」

「でしたら、誠意を持って女性に接して下さい。もし何かあれば、すぐに殿下に報告しちゃいますからね!」

モラセアの念押しに私も頷く。すると、エリネ様をはじめ皆が苦笑した。

聖騎士は清廉であることを要求される。だから女性関係での揉め事など以ての外だ。

そんな問題のある男がお仕えしていれば、エリネ様のお名前に傷がつく。人というのは

ゴシップが好きで、清らかな存在に対してもあれこれ勝手に想像し、汚してしまうものだ。

「そういうえば、聖騎士の皆つてどれぐらいの割合で特定の相手がいるんだろう」

私はティーカップを片手に首を傾げる。

「さあ……幸せな奴のことは興味ないんで」

女性達は発言したスルヤを見た。彼は良くも悪くも並の男である。

「えっと、青盾出身だったっけ?」

「そうだけど……なんで?」

「いや、青盾っぽいなあつて。ノリが軽い感じが」

今は制服が統一されて、自分が所属していた白鎧以外の人はどこの騎士団だったか曖昧になっているが、やはりたまたま思い出す時がある。

私達の会話を聞いて、元白鎧のバルロードがくすりと笑う。彼は後ろ姿がギル様とちょっと似ていて、ギル様が白鎧に所属した時は紛らわしいと有名だったそうだ。

「特定の相手がいる奴なんて、おそらく半分もいないと思います。ここにいるのは実力は買われていますが、恋人を作っている余裕がないというか……真面目で不器用な奴が多いんです」

バルロードは妬みも僻みもない、穏やかな口調で言う。その態度から考えるに、彼は

特定の相手がいる組なのだろう。

「自分が見たところ、酒や女性で問題を起こしそうなのは三人だけですな」

「三人もいるのか」

話を聞いていたポーテン様が危惧して身を乗り出した。

「今の生活に慣れてきたのか、気が緩みがちです。他の連中にもそろそろクギを刺さないで、危ないかもしれませんね」

「誰が言う？」

「ポーテン様にお任せするのがいいのでは？ 異性のルゼさんや、年が近いのに恵まれすぎのギルネスト殿下が言うよりは、反感を買わないかと」

ギルネスト殿下、ギル様。

私はその名を聞いて、心中複雑になった。必死に忘れようと自己暗示をかけ実際に忘れていたのに、他人の口から「ギルネスト」と出ただけで簡単にあの時のことを思い出してしまった。

私は花祭りの直後、そのギルネスト殿下からプロポーズの予告をされたのだ。意味が分からないが、予告だ。そして私の左手には今、仮の婚約指輪がついている。

本番はまだだ。たぶんもっと先になる。それはいいのだが、私はその予告を受けてか

ら、ギル様とあまり顔を合わせていない。ギル様は今忙しいらしく、神殿になかなか来ないのだ。

その忙しい理由は、早くエリネ様を襲った実行犯の首を取って、それを土産に本番をするつもりだから、らしい。なんというか……

ついで、そんな日は来なければいいのと思ってしまう。犯人は早く捕まるに越したことはないというのに。

私は自分で思っていたよりも、ヘタレらしい。たかが結婚でこんなに身構えてしまうとは。

私自身の能力や家族、親戚関係といった条件だけ見れば、私はギル様にとって都合がいいだろう。だから「どうして？」とは言わない。だが、現実味がないのは如何ともし難い。相手が美形王子様でなければ、もう少し現実のものとして見られるんだが……

私は本来、ただの孤児である。貴族の娘になったのは、父となっている人の政治的な判断だ。王子様の花嫁に夢を見て目を曇らすことが出来ない現実的な女に、どうしろとというのだ。

ギル様のことは、どちらかといえば好きだから、本当にどうすればいいのか分からない。だから放つとかれているのは気楽でいいのだが、その反動で怒濤の展開にならない

かと……。ギル様は、たまに予想も出来ないほど思い切ったことをするから。

私が頭の中で七転八倒していると、

「殿下は、ほら、戦場で幸せを掴もうとしている方ですから」

「なるほどな。確かに、その通りだ。引き受けよう。バルロード君は気が利くな」

とポーテン様が聖騎士達への指導を引き受けてくれていた。

「下手な噂が回ったら、他人事ではありませんから」

「やはり、家族から期待されているのかね」

「いえ、彼女に首を絞められます。とても信心深い女性なんですよ」

どこの男も、女には頭が上がりないうだ。

今日もエリネ様は、神官騎士を目指す聖騎士のマディさんと一緒に、自室で勉強をしている。神学も魔術もずいぶん理解が深まったということで、教師はより高度な知識を持つ神官医のセルジアスに代わった。

この時間のエリネ様の護衛当番というのは聖騎士達の間でも人気が高い。そもそも心優しい麗しの聖女様を護衛するのに、やる気を出さない男はそういないだろう。それに加えて、この時間の当番は同じ時間に行われる地獄の訓練をしなくてもいいのだ。

他に人気なのは、終わった後でたっぷり休みをもらえる夜警だ。気を抜きすぎないように、たまに私が奇襲をかけていたが、最近は皆気配に敏感になって、襲う前に気付くようになったのだ。そうなれば挨拶だけして終わるので、恐れられなくなってしまった。聖騎士達の実力と意識は格段に向上したし、他に何か問題があるだろうかと考えていた時だ。

ギル様が神殿にやって来た。

私はセルがエリネ様にいきなり難しいことを言い出さなしか見張るため、ドアの近くに控えていたのだが、ギル様の姿を見て咄嗟に二歩、後退した。そんな私の態度に、ギル様は片眉を跳ね上げる。

「お前、僕が来る度に嫌そうな反応を見せるな」

「い、嫌がついているわけではありません。滅多にお見えにならないから慣れてないし、覚悟も出来ていないだけです」

「そうか。慣れるまでは距離を置いた方がいいかと思ったが、逆効果だったか。ではこれからは、どんどん接触していいこう」

私は、墓穴を掘ったのか？

ギル様は接近して私の手を取り、甲に口づけた。この程度のことでも、生まれながら

の貴人ではない私は大いに戸惑う。体温が上昇して、やたらと胸が騒ぐのだ。私の弱点を突くことに成功したギル様は、実に楽しそうである。

「それよりもお前、聖騎士達に夜遊び禁止を言い渡したのか？ 厳しすぎるって泣きつかれたんだが」

「え？ 知らないです。私じゃないです」

私はふるふると首を横に振る。

「お前じゃないのか。なんでも、いきなり夜遊びを禁止されたらしい」

「この前ポータン様に、聖騎士達に節度ある行動を取るようにならなさいと注意していただきましたとお願いました。男性なので、加減は心得ていらつしやると思ったのですが……」

「ポータンが？ あいつら一体何をやらかしたんだ？」

その場にいた聖騎士達も驚いた様子でひそひそ話を始めた。どうやら彼らは知らないようだから、締め付けは一部の騎士達だけらしい。

「ギル兄さん。どこまでが禁止されているの？ まさか、夜は外出禁止？」

ギル様の従弟であるセルは、勝手に授業を中断して、好奇心のままに口を挟んだ。

「門限を設けられ、その時間に帰ってこれない場合は事前に届け出するよう言われたと、ハワーズが」

ハワーズの名を聞いて、皆は沈黙した。この花冠の騎士団一のお調子者。ギル様が切れる原因になることも多く、ギル様が神殿に鞭を置くことになった元凶でもある。

「それで、ギル様に苦情を言いに？」

「そうだ。聖騎士としての自覚はないのか俗物め、と追い返そうとしたら、それとこれは別だと言われたんだ。その上若くて美しい女性の多い職場だから、逆に辛いと言われればな」

確かに神殿にいる侍女や巫女達は、遊び半分て手を出せない身分の女の子達だし、夏になつて皆涼しげな格好をしている。恋人がいない男達には、少々刺激のかもしれない。

「動いて発散すればいいんじゃないですかね」

「そんなことで発散できるなら、性犯罪を犯す肉体労働者なんていないと言われた」

「恋人を作ればいいんじゃないですか？」

「それが出来るなら、悩んでいないだろう。思わず文鎮を投げつけてしまうぐらい鬱陶しかったが、ハワーズだけの問題ではないようだから無視もできない」

その時、こんこんとドアがノックされた。

「あの、そのことなんですが」

と、顔を見せたのはハワーズの友人であるシフノスだ。彼は廊下の警備をしていたは

ずだが、話を漏れ聞いてしまったようだ。

「何か知っているのか？」

「ポーテン様を怒らせた理由なのですが」

「中に入れ」

シフノスは焦げ茶色の頭を掻きながら、へらへらと笑って中に入る。

「ポーテン様に注意されて、どんな流れだったか『それならとっとと結婚しろ、協力してやる』って話になったんですよ」

まっとうな解決方法だ。ああいう男はしっかりした女性と結婚し、尻に敷いてもらえば大人しくなるものだ。

「それで好みのタイプの話になったんです。そうしたらあいつ、好き勝手言い始めて。『知人で言えば、エノーラさんみたいにゴージャスで知的な美人で、カリンさんみたいに巨乳でスタイルがよくて、実はエリネ様みたいにほわほわーっとしてて』と言ったあたりでポーテン様がぶち切れました」

まあ、気持ちは分からなくもない。私ならゴージャスあたりで殴ってる。

「そんな女がいたら、とつくに売り切れている」

「ですよねえ。いたら俺も紹介してほしいですよ」

ちなみに引き合いに出された内の二人は、ここにいる。特にカリンは自分の胸を押さえて、ふるふると震えていた。

ああ、カリンが怒っている！ ついでにウイシユニアも冷たい目をしている！

「殿下、俺からもいいでしょうか」

と、ダロスが手を挙げた。彼は花冠の騎士団でニース様と肩を並べるほどの美男子だ。加えて実力は五本の指に入り、元赤剣の例に漏れず性格も真面目、と女の子の理想が詰まった男である。

「何か問題が？」

「俺、ハワーズから変に絡まれるんですよ。女がいる男はいいなとか、女の子を紹介しろとか」

「自分より顔のいい男を妬み出したか」

「俺は生まれてこの方、女の子と付き合ったことなんてないのにつ！」

沈黙が落ちた。どういう意味だろうか。まるで分からない。

「え、郷土に結婚できないような身分の愛人がいるとか？」

「そんな人がいたら、こんな言い方するはずないだろ！ ハワーズといいお前といい、どうして信じないんだ」

シフノスの問いに、ダロスは憤慨して答えた。  
えっと、えっと……紛れもない好物件でも、新品のまま売れ残っていることがある、と。ギル様は額に手を当てて、目を見開いて固まっていた。そんなギル様を余所にダロスは続ける。

「あまり厳しくされると、本当に出会いすらなくなるのは事実だと思います。聖騎士団に所属してから、ある意味俗世と切り離されていますし」

「心配していなかったダロスですら……」

「まあ、条件が良くなった分、見合いの話は増えるでしょうが、うちの両親はそういうのに慣れていないから、聖騎士の妻として相應しい女性を選んでこられる心配です。よく知らない相手からの縁談は調査とか大変ですし、信頼できる伝手もないと調査の段階で騙されそうです」

ダロスは、ギル様の気苦労を増やしてしまったとも思ったのか、申し訳なさそうに言う。

そこにシフノスが口を挟んだ。

「ああ、分かる。友達の兄も、とんでもない女を掴まされて離婚してるんですよ。既に妊娠してて、父親を作るために急いで見合いして結婚して。でも生まれてきた子がまっ

たく似てないから結局発覚したそうなんですけど」

その話を聞いて、女性陣が驚いた顔をした。

「そ、そんなことが……」

「お見合い結婚で失敗したら傷つくのは女性の方だと思っていましたけど、そんなことがあるんですね」

巫女のモラセアが、同情するように言った。

これは、本気でちゃんと考えてあげる必要があるだろうだ。

時は流れて、夏の盛りが過ぎた頃。

私は、愉快な……いや、妙なことになったと思いつつ、この場に集められた給仕達を見回した。

ここは郊外に位置する、とある大きな屋敷のホールだ。

あれからギル様が出した対策は、一人一人面倒見るのは大変だから、とりあえず皆まとめてお見合いさせてみる、というものだった。聖騎士と女の子を集めた交流会、俗に言うお見合いパーティーの開催だ。

一見モテそうな男が、自分に自信を持っていないという例は、ダロス以外にもあった。

いい機会だから、そんな奴らもまとめて観察することにした。そうすれば問題点が見えてくるはずだ。もしその中で今回誰かといひ雰囲気になった奴がいたら、パーティーの後も面倒を見てやればいい。ギル様が協力すれば、たとえ奥手な男だとしても上手くまとまるだろう。もともと条件はいい奴らだ。

ギル様発案で、主催者はゼクセンの姉、エノーラお姉様ということになっている。ギル様は相手の女性を揃えるために、顔の広いエノーラお姉様に頼ったのだ。参加する女の子達は、彼女のお茶会に通う方々の縁者である。エノーラお姉様を取り仕切るゼルバ商会には、商売相手のことを調べる調査部署があるため、彼女らの身元がしっかりしていることは言うまでもない。

ちなみにそんな部署があるのは、裏がある商売をしている相手とでも、その背景を知っていれば有利に取引が進められるし、知らなければ火傷を負うからだ。その慎重さこそが、昨今のゼルバ商会の躍進の理由らしい。

ギル様がゼクセンを従騎士に、そして私を伴侶はんりよに選んだのも、この金と実力を持つゼルバ商会との繋がりを強化するためであると考えられる。特に私は女性初の騎士になったから、騎士団の上に立つ予定のギル様には都合がよかったのだ——と考えるようにしている。事実だし。こう考えておけば恥ずかしくないし。

もうすぐパーティーが始まる。準備を終えて整列する給仕達は、いつもと勝手の違う仕事にやや緊張気味であった。

「事前に説明した通り、今日皆さんに注意して見ていただきたいのは、主にお嬢様方です」  
彼らは小さく頷いた。そう、これがいつもとは違う点だ。

私は落ち着いた態度で皆を見回し、かけている眼鏡をくいと押し上げる。

「聖騎士達は訓練と魔物討伐に明け暮れる青春を送っており、見た目と中身がそぐわない……つまり可憐な容姿を持ちながら、常識では計れないほど根性のひん曲がった女性が世の中にいることを知りません。ですから皆さんには、女性達に裏の顔がないか見張っていただきたいのです。聖騎士の名誉が保たれるか否かいなかはあなた方にかかっています。給仕として空気のように接客しながら、女性達の『粗探し』をして下さい」

はっきり「粗探し」と言い切ったことに、彼らはわずかに戸惑いを見せた。

「その際は決して不自然にならないようにお願いします。そわそわする方がいれば、裏方に回してもらいます。また粗探し以外に、聖騎士達が奥手すぎるとか積極的すぎるなど、改善すべき点があれば報告して下さい。注意事項は以上です。何か質問がある方は？」  
中年の女性が手を挙げた。

「その方、どうぞ」

「粗探しとは、どの程度のものから報告すればよろしいのですか？」

「少しでも違和感を感じたなら、些細なことでもかまいません。男性と話をしている時とそうでない時とで態度が違うとか、実家や収入についての質問が話題作りの範疇を超えているとか、その人の考え方が分かるようなことであれば報告して下さい。もちろん逆に素晴らしい行動をとる方がいたら、それも報告を。これは品性や人間性の審査だと理解して下さい」

「かしこまりました」

それからいくつかの質問に答えを返し、拳手がなくなつたところで、こちらから切り出す。

「他に質問は？ なければ解散します。ああ、私のことはルノと呼び、同僚として接して下さい」

私は今、彼らと同じ制服を着ている。そしていつもと違うきつめの化粧の上に眼鏡をかけて、結い上げた赤毛のカツラをかぶり、少し踵の高い靴を履いている。ついでに、胸やお尻にボリュウムを出しているから、男装姿を見慣れた聖騎士達はなかなか私だと気付けないだろう。

「では、そろそろ時間です。皆さん、よろしくお願いします」

私は一同を見回して命じ、今回協力してくれるエノーラお姉様の執事、グモロスさんと一緒に颯爽と会場のホールから出た。

やがて客人が会場に集まり始めた頃、少しだけ中の反応を聞くと、給仕達はどうやら張り切つてくれているようだった。

粗探し。それは乙女心をくすぐる魔法の言葉！

愉悅を内に秘め、素知らぬ顔で接し、後で笑う。そして普段は秘めておかなければならない真実を、上司に報告まで出来る！ 考えるだけで血湧き肉躍る！

私は笑いそうになるのを堪えて階段の踊り場に立ち、客人達を見下ろした。

今日の聖騎士達は制服ではなく私服だが、変な格好をしている者はいなかった。親も聖騎士になつた息子のため、身につける物をそれなりに調べていたのだろう。中にはエノーラお姉様に相談して、上から下まで全てあつらえてもらった聖騎士もいるようだけど。

「グモロスさん、なかなか綺麗な子が揃っていますね」

私は隣にいる老紳士に声をかけた。

老紳士——グモロスさんは屋敷内のことだけでなく、エノーラお姉様の護衛までこなす万能執事である。難しすぎてマイナーな魔法の蒐集家で、その希少魔法は、こういっ



た催<sup>もよお</sup>して大いに役立つこと間違いないし！

「女性<sup>おんな</sup>は化粧で化<sup>は</sup>けますからなあ」

グモロスさんは穏やかな声で答える。

「女の化けようは、自分でも驚きます」

「ルノさんは土台がよろしいですからな」

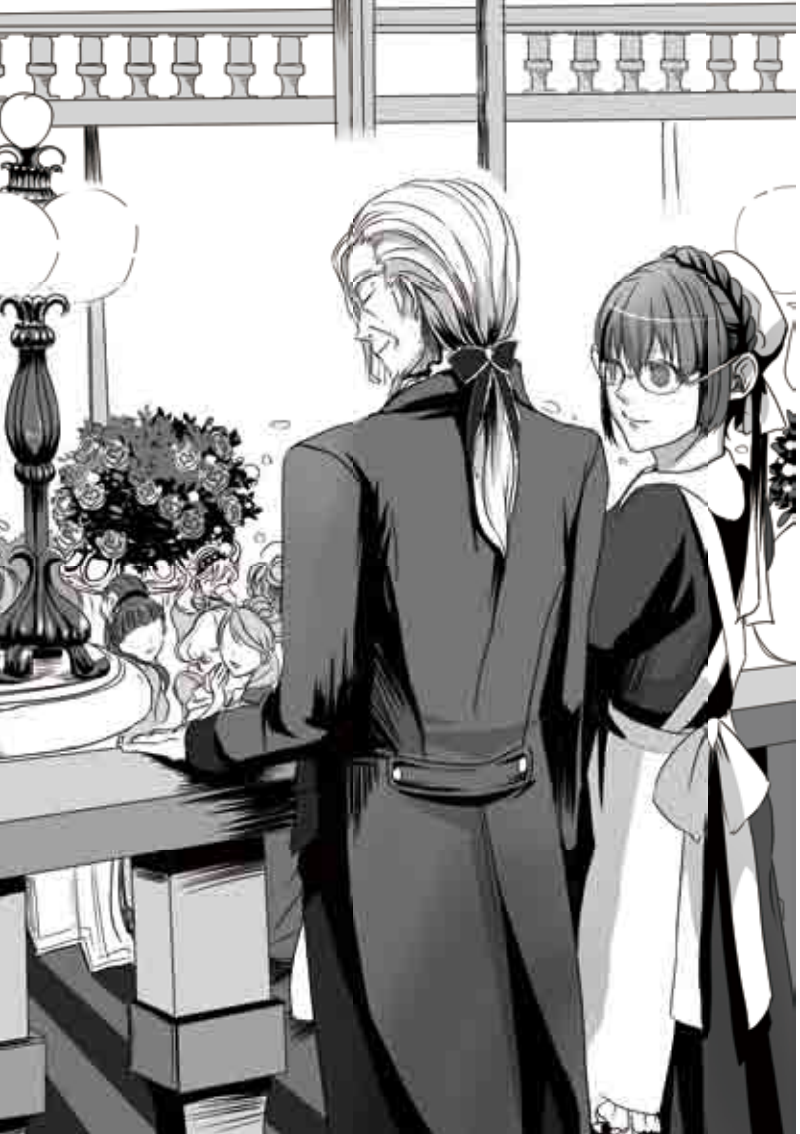
「顔に癖がないから、変えやすいそうです」

「世の中には、癖のなさを突き詰めたような美人と、癖に恵まれた美人がおりますからな」  
どうせなら、化粧しなくても美人と呼ばれるような顔だったらよかったのだが。ギル様なんかは、癖に恵まれた美形だから、私の地味さが目立つこと目立つこと。

こんなことを考えていても仕方がないので、客人達の様子を見る。

彼らは受付で名前を書き、さらに名札を胸につけていく。今回は粗探<sup>あらさが</sup>……出会いの場なので、お互い声をかけやすいようにという配慮だ。気に入った相手がいっても、名前も知らないままお開<sup>ひら</sup>きになったら間抜けだし。

聖騎士は、可愛い子を見つけてもすぐには声をかけるなという私の言いつけを守っていた。声をかけていいのは、パーティーが進行してからである。見合い相手の淑女達も、友達同士で手を繋いだり、ひそひそと話をしたりしながら給仕に案内されている。悪巧



みしているというよりも、楽しみで仕方がないというだけに見えた。

「ふふ、可愛いものですね」

「大半の女性は、あなたに比べれば可愛いものでしょう。あなたほど悪戯心のある女性はいても、あなたほど現実により切る女性は稀ですからなあ」

「私を引き合いに出さないで下さいよ」

「いやいや、これは失礼。確かに聖騎士の伴侶となる方に影の支配者になられても困ります」

「私をどんな目で……」

「ルーフェス様の頃から、陰より拝見しておりましたので」

エノーラお姉様の参謀でもあるこの万能執事は、私がルーフェス様に成り代わっていたのを知っているのだ。だから、私達——私やギル様、ゼルバ商会が地位や立場を上げていくのを、今の私達のように面白おかしく見守っていたのかもしれない。

「あの方達に何か難点があるとすれば、女性らしい陰湿さを隠し持っているかどうかでございましょう」

グモロスさんは、可愛らしい女の子達を見下ろしながら呟く。

人が寄り合えば、不思議と出てくるのが嫌がらせ、俗に言うイジメだ。理由もなく人

を苛める女はもちろん、苛められて即座に逃げたり屈服したりする女も、聖騎士の妻には向かない。苛めと戦った上でならまだしも、苛められたら苛め返してこそ……いや、それは必要ないか。

つまり、逃げたり屈服したりするにも過程や程度を見極めることが重要なのである。

給仕達はよく働いていた。粗探しの結果、私にまで『粗』が届けられたご令嬢は二人。

一人目は、自分でグラスを落としてドレスを汚したのに、使用人のせいにして叱責した令嬢。二人目は、周りの目を忘れてひたすら美味しそうにお菓子を食べるご令嬢。前者はともかく、後者は幸せそうだし可愛らしくもある。

グモロスさんはホールを担当し、皆と毎日顔を合わせている私は、女性しか入れない化粧室などを担当している。

「簡単にボロを出すような人が少なくてよかったわ」

誰もいない女性用化粧室の前で報告を受け、私は思わずそう口にした。

目当ての男についてキヤッキヤと語る女の子達は、とても可愛らしい。聖騎士という特別な男達相手の集まりだからか、こっそり趣味ではない男の悪口を言う者は今のところ皆無であった。友人同士だからといって気を抜き、神に身を捧げている男達を容姿だ

けで貶めるような女など却下だから良かった。

「はい。こんなに取り繕われた……いえ、やりやすい催しは初めてです」

給仕の女性がにっこりと微笑んで言う。

「聖騎士が相手だから、気をつけているのでしょうか」

子供が娘しかいない家は、婿をとって跡継ぎにする必要がある。そんな家からすれば聖騎士は理想の婿だろう。彼らは騎士の中でもエリートだし、そのくせそんなに危険な仕事はしな思われている。聖人が命を狙われることはあまりないからだ。

だから今の命がけの実情を知らない彼女達にとって、彼らは決して逃がしてはならない獲物だ。

「貴族の方も大変ですわね」

女性が同情したように呟く。

彼らは年若くして規律の厳しい騎士団に入ったため、貴族社会について疎い。

笑顔の下に魔性を秘める女達を、はたしてどれだけ見抜くことが出来るのか。

「誰か来ます。控えて下さい」

「え……はい」

私は給仕と共に姿勢を正し、壁に沿って立つ。すると女性三人が角を曲がって近づい

てきた。給仕はわずかに驚いた表情をしたが、それ以上は反応せず、人形のようにじつと控えていた。そして女性達が化粧室の前まで来るとドアを開き、彼女らが入ったところでドアを閉める。

「私は他を見えます。彼女達は任せました」

「かしこまりました」

後は彼女にお願いして、私はそっとその場を離れた。

この屋敷は疑心暗鬼に陥った王族が造ったものらしい。全ての部屋に様々な覗き見、盗み聞きのための設備が仕掛けられている。目的は当然、他人が何を考えているか知るため。まさに今回のイベントに打ってつけのものであった。

現在、私がいるこの狭い部屋は、屋敷中の音を集めるための部屋だ。ここではギル様とゼクセン、無理矢理ついてきたセルと、ゼルバ商会の社員が仕事をしていた。

机の上の水盆には、グモロスさんの魔術により、彼が見た光景が映し出されている。実際に見ているように動いたりしないが、映る光景が数秒ごとに変化する。これが、グモロスさんに協力を願った最大の理由である。

この術は普通数人がかりで行うものであって、単独で行うには相当訓練が必要らしい。

どうしても必要ならともかく、特に理由もなく訓練する物好きは彼だけだろうと、この国の宮廷魔術師である月弓げつきやうの人達が言っていた。

「いかがですか？」

ギル様が作った冷房用の大きな氷柱ひょうちゆうを避けながら、皆に尋ねた。

「今のところは何も」

「ギル様、ハワーズとダロスが女の子を取り合ってます」

ゼクセンの報告に私とギル様は、驚いて振り返った。彼は今、ホールの音を聞いているようだ。

「ハワーズがああダロスと？ 相変わらず無謀な男だな」

ゼクセンの言葉にギル様は心底驚いたように言う。あんまりな言葉だと思うが、聖騎士団一の美男子であるダロスにハワーズが太刀打ちできないのは明らかだ。

それからすぐに、水盆の光景が揺らぎ、睨み合う二人の姿が浮かび上がった。現場のグモロスさんの判断だろう。ゼクセンが報告を続ける。

「それが、ダロスは誠実な反面、押しが弱いので、ある意味良い勝負です」

「なんだと。あのお調子者、迷惑をかけていないだろうな。しかし、あいつがそこまでするとは、よほど美人なんだだろうな」

「ハワーズの『理想』を体現したような女性だそうです」

ゼクセンが「理想」を強調して言うと、ギル様はハワーズが話していたゴージャス云々うんぐんを思い出したのか、頬を引きつらせる。水盆に、ハワーズ達の後ろに立つ、それはそれは可愛い女の子の姿が映った。

「巨乳で華やかで美人で癒やし系か。おどおどした雰囲気か、昔のカリンみたいだな」

「そういえば、彼女、昔は大人しかったね。変わりすぎだよねえ。今の方がいいけど」

と、セルがけらけら笑う。他人事のように言うが、お前も変わった原因の一端だろうが。

「ギル様、その女の子が友人に顔色が悪いと言われて、化粧室に連れて行かれました。やはり迷惑だと思っていたようです」

ゼクセンの報告を聞き、ギル様はため息をつく。ダロスが相手なら、ハワーズが引けばいいと思っているのだろう。ご令嬢もお調子者よりは、勇気を振り絞って声をかけたきた、誠実を絵に描いたような美青年の方がいいはずだ。

ギル様は呆れながら、自分の担当している場所の音に意識を戻す。

男達も女性達同様、どの娘が気に入ったとかどの娘が自分にあるなどと情報を交換し合っているらしい。ハワーズを見た後では、彼らの行動こそが平和的で秩序あるものと思えた。

「ギルネスト殿下。おそらくその理想の女性関連で、化粧室の方から合図が」  
「音を大きくしろ」

ずいぶん古い設備のようだが、今でも十分使える。ここまで徹底したものを作る先祖にギル様は呆れていたのだが、実役に立っているのだから文句は言えない。

『ちよつとあなたねえ、あの方には私が先に目を付けたの。独占しないで下さる』  
いきなり問題しか感じられない女の台詞が聞こえてきて、ギル様は頭を抱えた。

友人を心配して連れ出したのではなく、いい男を独占しながら、それでも他の男に声をかけられている美女に対して、嫉妬したようである。続いて別の女の声が聞こえてくる。

『そうよ。あなたって本当に気が利かなくて鈍くさいんだから。ちよつと胸があるだけであつたく男つていうのは……。もう、最悪よ。ドレスは汚されるし！』

ゼクセンが自らの額を叩いて、アウトと呟いた。ドレスを汚したご令嬢は一人しかないはずだ。つまり問題のある女が、また問題行動を起こしているのだ。聖騎士達もドレスの時のことは知っているから騙されたりしないと思うけど、気をつけないと。

『あなたはしばらくここにいなさい。体調が優れなくて休んでいることにしてあげるわ』  
『そんなつ……』

『黙りなさい。さもないと……』

会話を盗み聞きする男達の顔が引きつっていく。嫌な奴というのは、どこにでもいるものだ。

脅していた女達は念を押してから、被害者を残して化粧室から出て行った。

「見張つててよかつたな……」

「苛めてる子は二人以上いたみたいですけど、誰でしょうね」

ゼクセンは名簿を見て呟いた。一人はドレスの件の令嬢だが、他は現場に確認しないと分からない。

『聴取室、聞いていますか？ いかがいたしましたでしょう』

抑えたような女性の声が聞こえてきた。先ほど私が化粧室で話していた給仕だ。

「どこの誰か分かっていますか？」

私が尋ねると、給仕から応答が返ってくる。

『ああ、ルノ様ですか。はい、もちろん全員把握しております。中にいるお嬢様はいかがいたしましたでしょう。家のことで脅されていたようで、簡単にはホールに戻って下さらないかと存じます』

このままでは彼女も可哀想だし、ダロスも可哀想だ。

「私がそちらに行つて、戻るよう説得してみます。あなたは一度報告に戻り、情報交換を」

『かしこまりました』

私はギル様を振り返り、笑みを浮かべる。

「行って参ります」

「ああ、頼んだ」

綺麗な女の子の味方になって、誰かの悪企みを妨害するのは、なんだかとっても楽しい。

化粧室にやって来た私は、椅子に座って泣く、目の前の少女を観察する。

女性らしい体つきをした、プラチナブロンドの儂はなげな少女だ。これだけ美しいならさ

ぞ男達が寄ってきたことだろう。状況が手に取るように分かる。何しろダロスまでもが、勇気を振り絞って声をかけたのだ。

確かにこの美少女に勝つには、家の力関係で脅すしかなかったのだろうが、それを実行したらお終いだ。

「顔を上げて下さい、お嬢様」

私が声をかけると、彼女はハンカチを押し当てていた顔を上げる。真珠のような涙が頬を伝う様は、同性でもぐっとくるほどだ。私が男なら口説いていたかもしれない。

「お化粧が落ちていますね。私がお直しいたしますので、ホールに戻りましょう」

「ごめんなさい。そういうわけにはいかないの」

使用人への態度は良し。

「状況は察しております。ですから、でしゃばらせていただきませんでした。今のあなたを見捨てれば、私が聖騎士の皆様から恨まれてしまいます。あなたのように美しい方なら、彼らが守って下さるでしょう。どんな状況であろうとも」

まずは安心させなければならぬ。家のことで脅おどされたら、泣き寝入りしようとするのも当然だ。これで何の対策もなしに行動に出るような女は、聖騎士の妻として論外である。

「それに、神殿から白い目を向けられてまであなたを排するほどの力が、彼女達にありますか？」

彼女はきょとんとして私を見た。男性や神殿に頼るといふ発想はなかったようである。端はなから諦めていたのだ。

「おそらく彼女達の父君は、娘が何を言おうと聞く耳など持ちません」

人は、誰かに言い切られるとついそんな気分になるものだ。この場合は相手が反発を覚えない程度に言い切ることが大切である。

「どうしてあなたには、そのようなことが分かるの？」

「もちろん、私の経験からの憶測に過ぎません。しかし今回の集まりでは、生活態度の悪い貴族の子女は外されています。ですから先ほど申し上げましたように、親が娘の言うことを鵜呑みにしてあなたの家をどうにかすることはありません。そもそも聖女様に関する事で悪評を立てられるのは、どんな貴族であっても避けたいことでしょう。どうぞ、堂々となさって下さい」

ここまで言ってまだ泣くだけなら、聖騎士の妻には向かない。もっと穏やかな環境にいる相手に嫁ぐべきだ。

「本当に……そうなると思いますか？」

「もちろんです。お家の事情は存じませんが、何か圧力をかけてくる家には『聖騎士に相手にされず、嫉妬のあまり他の女性を脅すような愚かで不器量な娘と、その我が儘を聞く親がいる家』との悪評がきますから」

もし親子揃って馬鹿だった場合は、今後のためにも今言ったことを世間に広めるつもりだ。他にも同じような揉め事があつたら、同じことをする。聖女の御前で低俗な揉め事は許されない。

「申し遅れましたが私は救護係です。私に大丈夫と言われたから逆らえなかつたと言え方がいいですよ。それにここであなたをホールにお連れできなかつたら、私がギルネス

ト殿下からお叱りを受けてしまいます」

私は彼女の涙を拭い、用意していた道具でさっと化粧を直して差し上げる。本当に、花のように可憐な女の子だ。

「まあ、なんてお美しい。聖騎士様も、さぞお嬢様のお戻りを待ち望んでいることでしょうね。さあ、参りましょう」

私が手を差し出すと、彼女は椅子から立ち上がった。

「あ、ありがとう。あの、あなたのお名前は……」

「ルノと申します」

「私はブレンダです。あなたのおかげで元気が出ました、ありがとう。こんな風に氣を使ってくれるなんて、さすがはギルネスト殿下が手配なさった使用人ね。覚えておくわ」

「ありがとうございます」

私は笑みを浮かべてブレンダの手を取り、ホールまで案内した。

ブレンダがホールに姿を見せると、聖騎士全員の視線が彼女に集まった。やはりこの娘が一番人気ようだ。

「や、やあ。大丈夫だったかい。様子を見に行こうと、思っていたんだよ」

何故か彼女のいない聖騎士団一の美男子、ダロスが緊張した様子で近づいてきた。や

やぎこちなさはあるものの、見栄えのいい笑みを浮かべている。以前聖騎士は人前に出ることが多いからと笑い方の指導を受けたことがあるのだが、その練習の時よりも熱がこもっている気がする。すっかりブレンダにのぼせ上がっているようだ。言葉はやや硬いが、この笑顔があれば大丈夫だろう。

ただあまりにいつもと様子が違うから思わず噴き出しそうになり、堪えるのが大変だった。離れたところで、耐えきれずに笑ってる奴もいる。

「では私は……」

これで、と続けようとしたところ、ブレンダに手を握り締められた。理由は一つ、いじめっ子が睨んでいるから、不安なのだ。しかし彼女を守るべきは、給仕に化けている私ではない。

「大丈夫です、ブレンダ様。もし気分が悪いのであれば、向こうの椅子にお座り下さい」

ここでどうにかしてダロスに引き渡せば全て上手くいく。普通の令嬢は、他の女に夢中な男につきまとうほど恥知らずではない。例外があるとすれば、友達のふりをした女だけだった。

「あら、ブレンダ。もういいの？ 辛ければ休んできた方がいいわ」

案の定、ブレンダを追い返そうと女達がやってきた。

「ブレンダ様は大丈夫ですわ、お嬢様。慣れない場で緊張していらっしやるだけでございます」

「あら、どうしてそんなことが言い切れるのかしら」

「医者判断ですわ。お酒さえ召し上がらなければ、何の心配もございません」

「あら……医者が出たの」

「はい」

ギル様と一緒に隠れてはいるが、医者なら本当にいる。忘れられがちだが、セルは医者だ。

有無を言わずダロスにブレンダを引き渡そうとしたところ、彼は眉を寄せて私を凝視した。いつもは小さく見えるよう踵の低い靴を履いているが、今日の靴は踵が高いので、目線が彼と並んでいる。こうなると顔を逸らしても無意味だ。

「……騎士様、よろしく願います」

私が念を押すと、ダロスはこくりと頷いた。顔がやや引きつっている。どうやら私の正体に気付いたらしい。

「まあ、何を考えているの。体調が悪い方を、ダロス様に押しつけるなんて」  
どうしても追い返したいのか、まだ諦めずに絡んでくる。



「何か問題が？」

「医者がいいと言っても、本人が体調が優れないと言っているのよ。静かな場所で休ませておくのが普通ではなくて？ それとも、ブレンダがここにいなければあなたに不都合があるのかしら？」

「まさか」

私が否定すると、ダロスが引きつった顔のまま女を見た。だが、口は挟まない。余計なことを口にした時の恐ろしさを、彼は知っているようだ。

「あなたひよっとして、彼女の家に雇われてこの会場に入り込んだんじゃないか？」

「それはございません。私達を雇われたのはギルネスト殿下でございます」

「これだけいるなら一人や二人、買取するのは簡単でしょう」

「困ったお方ですね。吐いた言葉は呑み込めないのですよ？」

彼女は初対面の相手を、王族を裏切った罪人呼ばわりしているのだが、それがどれだけ大事か理解できていないのだろうか。

彼女はダロスが目当てというよりも、とにかくブレンダが気に入らないだけのように見える。自分より立場の弱い者を踏みこむことを喜びとしているのかもしれない。イジメとはそういうものだ。

「ダロス様、お気になさらず、この方をよろしくお願いいたします。少し心細いようなので、しっかりお守り下さいませ」

「か、かしこまりました」

ダロスは反射的に敬礼する。私は彼の上官になった覚えはないのだが。

「ああっ！ 見覚えがあると思ったらルゼか」

「馬鹿っ」

ダロスの様子を見て、私の正体に気付いた一人の馬鹿が、あっさりと名を口に出した。私はその馬鹿、つまりハワーズにスプーンを投げようとしたが、その前に女性達が騒ぐ。

「ルゼっ!？」

「まあ、まさか聖騎士のルゼ様」

「どうりで気品に満ちた給仕だと思いましたが」

「騎士様方が心配で、様子をご覧になっていたのね」

あっさりとはバレて、女性達に情報が伝わっていく。私の隣にいたブレンダも、口元を押さえて驚いていた。大口を晒さらさないその仕草も可憐とよである。これに関しては、いじめっ子の方もちゃんと出来ている。咄嗟とつさに出てくる仕草には育ちがはっきりと出る。見習わなければ。

「くそっ、詰め物かっ」

聞こえた声に、私は今度こそスプーンを投げた。それを額で受けたハワーズは、顔を押しえて悶絶する。

「馬鹿だろお前」

「救いようのない馬鹿だなお前」

「帰ったら殿下のお仕置きだぜ」

「まさかお仕置きを受ける趣味がっ!？」

「ねえよっ!」

聖騎士の恥さらしと罵つてやりたかったが、笑みを浮かべて堪えた。

「ルゼさんが怒ってるぞ、おい」

「終わった……」

「明日からのしごきがっ」

「いや、これはハワーズ一人の責任だろ」

連帯責任という言葉が頭から抜け落ちていく聖騎士達に、頭痛を覚えた。沈痛な面持ちで奴らを見ていると、ブレンダが胸の前で手を合わせた。

「申し訳ありません、私が引き止めなければ気付かれませんでしたのに……」

「いえ、あなたのせいではありません。ぐずぐずしていたダロスのせいです」

「えっ!？」

ダロスには顔ばかりでなく、声まで引きつらせていた。

「そんな、ダロス様のせいではっ」

「ふふ、男は自ら進んで女性の盾になりたがるもの。美しいあなたは、男性の厚意に甘えておけばよいのです」

そう言うてから、私はダロスを見た。

「ダロスでも誰でもいいが、男ならしつかりとご婦人をお守りしなさい」

「はっ」

「私は近くの部屋で待機しているから、何かあったら呼んでちょうだい」

「はっ」

「私は上司ではないのに、何故敬礼するの」

「あ……」

私はギル様やニース様の隣に並んでいることが多いから、敬礼が癖になっているのだろう。

「ではブレンダ、心おきなく楽しんで下さい」

「は、はい。ご親切にありがとうございます」

私は颯爽とホールを出て行くとする。しかしその前に、別の女性に声をかけられた。「ルゼ様、お待ちになって」

無視するわけにもいかず、足を止める。

「お嬢さん、いかがなさいましたか？」

「せっかくいらっしやったのですから、ルゼ様も待機などなさらずに、こちらにいて下さいませ。私、騎士様がどのようなお仕事をなさっているのか、とても気になります。でも男性のお話は女の私にはなかなか理解できなくて……ぜひ同じ女性のルゼ様からお話を聞きたいのです」

真面目な顔で願ひ出る少女の視線を受けて、青筋を立てるギル様の顔が目につかんだ。ここで私がちやほやされても意味がない。しかし断れない。私は聖騎士だ。女性に問われ、その答えと暇を持っているのだから、応じなければならない。だからこう言うしかなかった。

「私などの話で、彼らについて理解を深めていただけるのであれば、喜んで」

「聖騎士の主たる仕事は聖下の身辺警護ですが、交代制です。暇があれば自己鍛錬をし

て、休む時はしっかりと休みます。華やかなのは聖下が外に出られる時だけで、普段は地味なものですよ」

「まあ、鍛錬を」

「はい。聖下を狙う不屈き者がおりますので、気は抜けません」

「邪神崇拜者の仕業だと聞きましたが、来年の祭りは大丈夫なのでしょう吗か？」

「月弓の魔術師達も協力して、より堅固な対策を立てているところです。来年は何も起こしようがないでしょう」

「まあ、たのしい」

「来年は、ぜひ他の騎士達のことも見てください。美しい女性に応援していただければ、気合いが入るでしょうから」

騎士団の私生活の説明から、騎士団の宣伝に話を移す。

女性達は私の話を、それは熱心に聞いている。もちろん彼女らは騎士達そっちのけで集まっているわけではない。ほとんどは騎士達と談笑しながら、私の話を聞いている。私に夢中で男達を放置するのはごく一部だけである。

その一方で私は、騎士達と女性達との間の共通の話題になっていたようだ。話題の女性騎士の実態を知るには、同僚である彼らに聞くのが一番早い。

私やエリネ様について語りながら、必死に女性達に自分を売り込んでいる奴は心配ないだろう。独り身で寂しいのだから彼らも必死である。自慢は鬱陶しいからするなど言い含めていたため、注意しながら話している。誇りを持つことと自慢することは別ものだ。「ルゼ様は何が切っ掛けで騎士になろうと思われたのですか？」

ブレンダに問われ、私は笑みを浮かべた。顔に笑みを貼り付けたダロスの視線が突き刺さってくる。ちゃんと仲を取り持つから、睨まないでほしい。

「なろうと考えたことはありません。エリネ様が聖女であると分かった時、それを知った邪な者が領主の立場を利用してエリネ様を手に入れようとしていたのです。聖騎士団を結成してお迎えに上がるうにも間に合わないのです、個人で竜を飼っていた私が特例で聖騎士となり、いち早くお迎えに上がりました。聖女様に帯剣したままお目通り願うには、聖騎士でないといけなかったのです」

騎士団員の大半が試験の際に私にぶちのめされたという経緯は、この場で言うべきことではないので、こうやって説明した。

「まあ、悪い方がいるのね」

「はい。それに民は領主には逆らえません。良い領主であればいいのですが、民を自分に贅沢をさせるための家畜と考えている領主の場合、このようなことは珍しくありません

ん。ですが、今回お招きした方々は、ギルネスト殿下が厳選した立派な家のお嬢様ばかりです。女性同士で新しい交友関係を持つのもよいでしょう」

ブレンダは口元を手で隠した。化粧室での私の説得を思い出したのだろう。

「ギルネスト殿下に選んでいただけなんて、光栄ですわ」

ブレンダのこの言葉で、他の名家のお嬢様もブレンダとお友達になりたいと思ったことだろう。あんなろくでもない友人ではなく、いい友人を作ってもらいたい。

「本当に、殿下は素晴らしいお方ですね。家畜臭い田舎領主のことまでご存じなんて」

空気を読まない台詞が聞こえた。誰の台詞なのかは言うまでもないだろう。こういう場合、私はどうすればいいんだろうか？ 昔なら容赦しなかったが、今の私は聖騎士。

ま、いつか。気にせずダロスに話を振る。

「そういえばダロスの領地は、牧畜業が盛んだったわよね」

「え……よく知ってたね」

「あなたのご実家からエリネ様にと、チーズが送られてきた時に聞いたの」

とても立派なチーズで、エリネ様はよく分からない芸術品をもらった時よりよほど喜んでいました。

「そういえば、ルゼさんはチーズが好きだったね」  
 「ええ、私も分けていただいたけど美味しかったわ。ご実家の方にチーズ造りの名人がいるんですってね」

「ああ。エリネ様にお褒めいただいたと知って、喜んでるそうだよ」

ダロスはやや察して、大げさにならない程度に乗ってきた。

「俺も小さい頃は、よく家畜の世話の手伝いをしたよ。実際に触れ合わないと分からないということも多いからね」

それはそうだろう。分かった上で信頼できる人に任せると、自分は何も知らないまま全て誰かに押し付けるのでは得るものが違う。

「今俺が乗っている馬は、お産に立ち会ってずっと世話し続けた馬なんだ」

「ダロス様は馬がお好きなんですか？ 私もです！」

ブレンダがぱあっと顔を輝かせた。馬が嫌いだという男は少ないだろうが、顔に出るほど馬が好きという女性は珍しい。何にせよ、共通の話題があるのはいいことだ。

「俺も馬は好きだよ！」

せっかく美男美女が楽しげに語りおうとしたのに、ハワーズが口を挟んだ。彼に反省する気や空気を讀む力はないようである。ティタンの場合は間の悪さが役に立つことも

あるが、彼のは役に立たないから救いようがない。だから無視することにした。

「ロイドのところは、確か養蚕ようさんが盛んだったよね」

「そうだよ。エリネ様がお召しになっている絹きぬの半分は、うちの絹なんだ。絹は肌が良いって知っている？ 絹糸を紡ぐ人は皆手が綺麗なんだよ」

ロイドが隣に立っていた目当ての女の子に、自慢げにならないように教えた。美容に絡めて話すという手段は、女の子の興味を引くのに非常に有効だ。

「真珠もお肌に良いそうですね。私の遠い親戚が真珠の養殖をしていて、私も分けていただいているんです」

ブレンダがふんわりとした調子で話すのを聞いて、騎士達は同時に顔を見合わせる。「ブレンダさん、ひよっとしてホライスト家の親戚？」

「はい。ダロス様もゼクセンちゃんをご存じですか？ ギルネスト殿下にお仕えしているのですが」

ブレンダは首を傾げた。

ちゃん、と聞いて、口を挟む機会をうかがっていたハワーズが、笑いを堪こらえるように口を押さえる。

「……もちろん知っているよ。彼のお姉さんのエノーラさんはよくエリネ様に真まぎ物ものを

捧げに来るし、ルゼさんの妹は、ゼクセンの婚約者だからね」

「えっ?」

彼女は驚いた顔をしてダロスタロスを凝視する。

「知らなかったの?」

「申し訳ありません。私、そういった情報に疎とくて……」

「たまに顔を合わせるだけの遠い親戚の婚約者なんて、俺も知らないから仕方がないよ。でも、エノーラさんの親戚だなんて、すごい偶然だね。俺達、エノーラさんにいつも世話になっていて、今日俺が着ている服もエノーラさんにあつらえてもらったんだ」

私は二人の様子を見て安心した。ハワーズが悔しげにしているから、他の聖騎士に目配せして退散させる。目配せだけで彼らが察したことから考えるに、誰が見てもハワーズは邪魔な存在だったのだ。

他にも何組かいい雰囲気になっている。いずれも突つけばまとまりそうだ。そうすれば、ギル様もこんなところではばれてしまったのを許してくれるだろう。

などと考えていると、さっきから私の側を離れない一人の少女が、恥はずかしげに言った。

「ルゼ様。実は私、ルゼ様のファンクラブに入っていますの」

「へえ……………え? 今何と?」

私は少女の純粋な瞳を見つめ返して問う。

「ルゼ様の公式ファンクラブの会員なんです」

「実は、私も」

彼女とは反対側から、別の少女が瞳をキラキラ輝かせながら言った。

「ふあ、ファンクラブ? 公式? 私は初耳です」

「えっ?」

令嬢達は顔を見合わせた。

「まさか、詐欺?」

「ああ、いや、それ、公式で間違いないよ」

少し離れたところにいたマデイさんが慌てた様子で口を挟んだ。彼はモテていないわけではないが、このお見合いパーティーにあまり積極的ではないらしく、ずっと隅の方すみにいた。

「いや、マデイセル。本人が知らないのに公式って、無茶苦茶な」

ロイドが戸惑ったように言う。

「……………ばれてしまったのなら仕方がない。会長はクララちゃん、ルゼさん以外の人——つまり殿下やエノーラさん、それとルゼさんのご両親公認なんだ」

「は？」

クララとは、私が孤児院で勉強を教えていた時の生徒で、非常に優秀だったため、ギル様が後見人になって学校に通わせている女の子だ。

「クララが？　なんで私には誰も言ってくれなかったの？」

「事前に聞いたら却下されるからって」

まあ、却下に決まってる。だから、判断としては正しいのか。本人に知らせず、同意しそうな周りの人から承諾を取る。私がよくやる手だ。私の教え子が私に似た手を使うのは当然だろう。

「……ということとは、最終判断を下したのはギル様？」

私のことを放ったらかしにして、そんなことをしてただなんて、なんて人だろうか。後で見ているよ。

「そう怒るな。クララも学校では微妙な立場なんだ。良家の子女ばかりの学校だからな」  
数日後、逃げ回っているギル様とゼクセンを神殿でようやく捕まえて文句を言う。するとギル様は面倒臭そうに言った。

「だからって、内緒にしていることはなかったじゃないですか。だいたい、学校で微妙

な立場だからって、私のファンクラブを作る意味が分からないんですけど」

「人気だぞ？　会員誌は部数が増えているし、グッズも売れている。それを仕切っているから周りから興味を持たれて友人も出来たらしい。その上グッズの売上げはクララの日用品代になるんだ」

意味が分からないけど、クララの役に立っていると言われたら反論できない。悔しいっ！

それからギル様達の後について聖騎士用の食堂に行くと、訓練を終えて休んでいる聖騎士達がいた。ここは談話室にもなっているらしい。彼らはこのまま食事を取り、酒を飲むのだ。

席を探して入り口で食堂を見回すギル様の後ろで控えていると、中から愚痴ぐちが聞こえてきた。私の名がちらほら出てくるから、ギル様と私には気付いていないようだ。

「ブレンダさんとデートしたら、ルゼさんのことばかり聞かれるんだ。半分ぐらいはルゼさんのことだった。残りは馬についてだった」

「ダロスブレンダちゃんとデートできただけでいいだろうっ！　あの子は俺の理想だったのにつ……！」

「バーカ。お前、相応ふさわしくなさすぎてルゼさんに無視むしされてただろ。途中から『誰かこ